



愛犬と街に出よう！

人とペットが、もっと一緒に暮らせる社会へ

— ペットパスポート[®]・プロジェクト —

公益財団法人 日本ヘルスケア協会
人とペットの共生によるワンヘルス部会



もっと、ずっと、いっしょに。

“人とペットの共生によるワンヘルス部会”の活動目的

◆ 部会が掲げる 2 大目標

1. 社会目標：ペットと安心して暮らせる環境の整備およびペット飼育がもたらす多様な健康効果（介護費抑制、認知症リスク低下等）の社会啓発を行います。
2. 産業目標：減少傾向にある犬の飼育頭数を増加へ転じさせ、ペット関連市場が「人の健康維持」に不可欠なヘルスケア産業であることを社会に周知し、振興を図ります。



ワンヘルス部会長 越村義雄

一般社団法人 人とペットの幸せ創造協会 会長

◆ 部会の構成員（五十音順）

- 一般社団法人 人とペットの幸せ創造協会
- 赤坂動物病院
- イオンペット 株式会社
- 株式会社 トーエートレーディング
- 共立製薬 株式会社
- ジャペル 株式会社
- ヤマザキ動物看護大学
- ユニ・チャーム 株式会社

なぜ「ペットパスポート®」なのか？

受け入れる側と飼い主側、双方の不安を「信頼」に変える

施設側の不安

衛生面は？

他のお客様への配慮は？

吠え・行動は大丈夫？

飼い主側の不安

一緒に入れる？

社会の中で適切に行動できる？

安心して利用できる？

不安 → 共通ルール → 信頼



「入れるか」から「人と犬が安心して利用できるか」へ

健康

健康管理・予防

行動

社会性・マナー

飼い主の責任

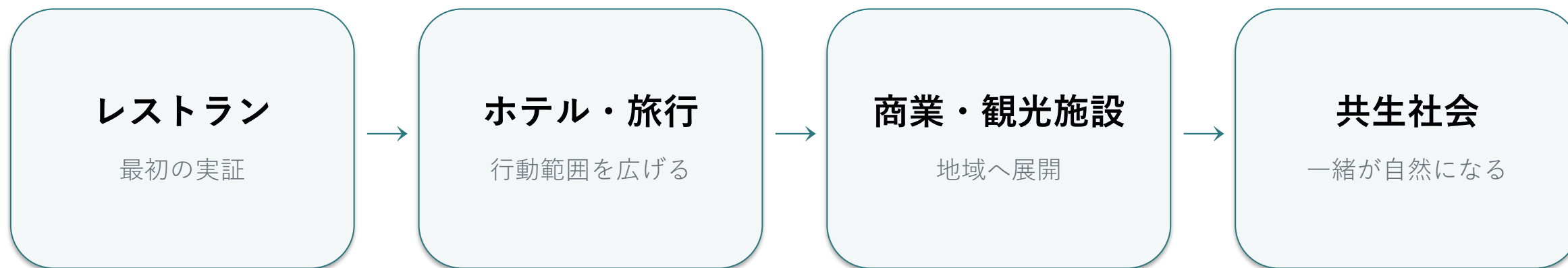
適正飼養・周囲への
配慮

獣医師は、人と動物が安心して共生できる社会を支える専門家



ペットパスポート®を目指す社会

ペットパスポート®を発行することがゴールではありません



受け入れる社会 と 責任ある飼い主を、同時に育てる



日本ヘルスケア協会とペットパスポート®

異なる分野をつなぎ、人とペットのWell-beingを社会全体で支える

獣医師

愛玩動物看護師

しつけインストラクター
トレーナー

ペット関連企業

飲食・宿泊・観光

行政・地域

飼い主

「認定制度」から「社会運動」へ

人とペットが共に暮らしやすい社会をつくる



本日のプログラム — 構想から実践へ

- 1 ワンヘルス部会会長 越村義雄〔10分〕 理念・趣旨・経緯
- 2 共立製薬株式会社 福島正晴〔25分〕 社会的背景・海外事例・ペットパスポート®概要
- 3 ヤマザキ動物看護大学 准教授 秋山順子〔10分〕 認定制度・認定試験・実証研究
- 4 デモンストレーション〔15分〕
- 5 まとめ〔5分〕 次の一歩へ



理念 → 社会的背景・課題 → 制度 → 実証 → 実際の行動



②社会的背景と海外事例 ～課題解決の為の具体的な施策～

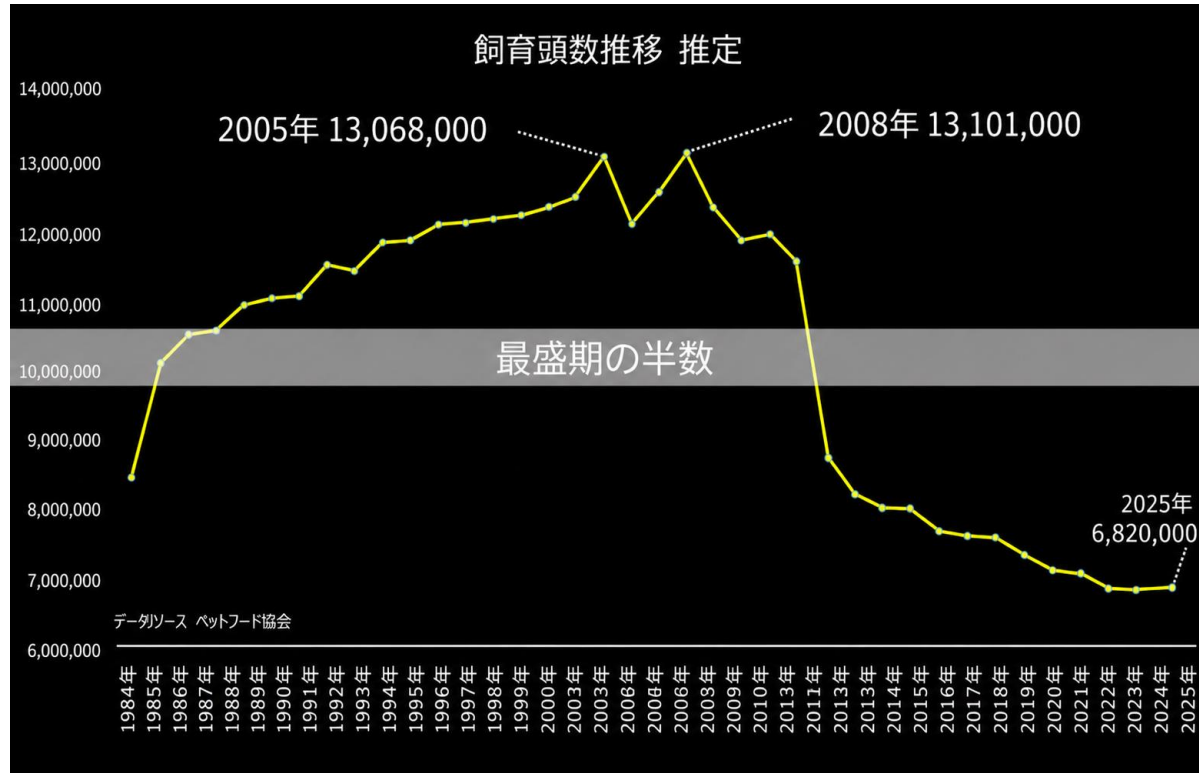
共立製薬株式会社 福島正晴



もっと、ずっと、いっしょに。

犬の飼育頭数は長期的に減少

～犬と暮らし続けられる社会環境が課題に～



一般社団法人ペットフード協会 全国犬猫飼育実態調査

減少の背景として考えられる複数の要因

- ☐ 犬猫価格の高騰や飼育コストの増大
- ☐ 住宅事情や飼い主の高齢化と将来の飼育継続への不安

犬と共に社会参加できる場所や仕組みの不足

- ☐ 飼育をためらう一因である可能性



犬と暮らすことを選び、安心して暮らし続けられる社会環境の整備が求められています



日本国内におけるペット同伴の『極めて厳しい制限』

● 欧米諸国との著しい社会的インフラの隔たり：

- ・ 欧米では、公共交通機関、飛行機内、飲食店、スーパーなど日本より同伴可能な場面が多い例がある
(国・地域や施設ごとにより条件は異なる)
- ・ 日本では、食品衛生、他客アレルギー、安全性の観点から多くが禁止されている



● 同伴外出における『個別判断』が引き起こす不透明な壁：

- ・ 同伴可否や受入基準がすべて店舗や運営会社ごとの裁量に依存している
- ・ 事前に調べて現地へ行っても、その日の混雑状況や現場スタッフの判断で拒否される場合も



● 飼育者と非飼育者の間の『意識の隔たり』を深める要因に：

- ・ 共通の客観的なルールがないため、双方にストレスと心理的な壁が生じている



ペットパスポート®プロジェクト



ペットパスポート®プロジェクトとは、
 家族としてのペットをもっと**良い子に育て、**
飼い主とペットが共に社会参加することを推進し、
人とペットが様々なところに一緒に行ける社会の
 構築と、ペットを同伴しない人も安心して過ごせる
 環境づくりを目指します。
 人・ペット・環境のヘルスケア（健康）を向上させ、
 長期的には人とペットの幸せな共生社会の実現を
 目的としています。



ペットパスポート®プロジェクト

【仮説】

適切に行動できる犬と、責任を果たせる飼い主が増え、施設側に共通の受け入れ基準があれば、安心して選べる同伴機会を段階的に広げられるのではないかな。

【飛行機内・空港トイレ】



【ドラッグストア・スーパー】



【街中にうんち袋】



ペット同伴をめぐるステークホルダー「3つの不安」

1

店舗・施設



「衛生・安全管理
と他客への配慮」



- ✓ アレルギーや犬が苦手な顧客への説明責任
- ✓ 急な粗相による施設衛生・ニオイの悪化
- ✓ 咬傷事故等の責任の所在が不透明



安心・安全に配慮した
受け入れ体制への不安

2

飼い主



「マナーへの懸念
と断られる不安」



- ✓ 愛犬が他の人や犬に対して興奮しないか
- ✓ マナーが適切にできているかという不安
- ✓ 店舗の入口で拒否されるのではないかと
いう不安



愛犬と一緒に安心して
お出かけしたい不安

3

一般利用客



「犬への苦手意識
などへの不安」



- ✓ 過去の経験による犬への苦手意識
- ✓ 毛の飛散や衛生面での抵抗感
- ✓ マナーの悪い飼い主に遭遇した際の不快感
や不安



快適・安心して利用したいという不安

犬との暮らしがもたらす未来の社会的価値

犬が日常生活に与えるポジティブな変化



● 生活リズムの確立と運動量の増加

毎日の散歩や世話を通じて、飼い主自身の生活リズムが自然に整い、活動的な習慣を維持しやすくなる



● 地域社会でのコミュニケーション活性化

散歩中の挨拶や立ち話などをきっかけに、地域内での会話や交流が広がり、孤独感や社会的孤立を和らげる



● 配慮と責任から育まれる真の共生

この価値を社会全体に広げるためには、ペットオーナー自身の徹底したマナー遵守と、周囲への思いやりが絶対条件となる



犬と暮らすことの効果

犬と暮らす子どもの効果

幼児期から、犬や猫と暮らしたり、農場で暮らし様々な家畜の世話をして成長したときの効果



- ・ 乳児期の犬・猫との生活が将来のアレルギー発症リスクを低下（スウェーデン小児アレルギー専門医学会発表）
- ・ 心身の健康を支える
- ・ 辛い時も抱きしめる相手になる
- ・ 誰にも話せないことを打ち明ける
- ・ 優しさの表現が自然に身につく
- ・ 生きること、別れのあることを教えてくれる
- ・ 人類としてのプライドを自覚する



犬と暮らすことの効果

犬の飼育率が高い地域は犯罪率が低い

犬と犯罪

石黒格（立教大学）

Pinchak et al. (2022) は、街区を単位として犬の飼育数と犯罪の発生件数との関係を検討し、弱いものの、罪種によって犬の飼育頭数の主効果、あるいは犬の飼育頭数×住民間の信頼の交互作用を見出した。

本研究では、東京都下の自治体を単位として、2004～2020年までの飼育犬登録数と刑法犯認知件数の関係を、罪種の大分類ごとに検討した、オフセットを用いた混合効果負の二項回帰モデルによる推定の結果、人口当たりの犬の数が多いほど、複数の罪種分類で認知件数が少ないことを示した。



国内の観察研究が示す健康・介護との関連



介護費用の抑制効果

介護費が「約半額」に

東京都健康長寿医療センターの17ヵ月調査では、ペット飼育者は非飼育者に比べて介護保険サービス利用費が半額近くに抑制されたと報告。



出典：東京都健康長寿医療センター



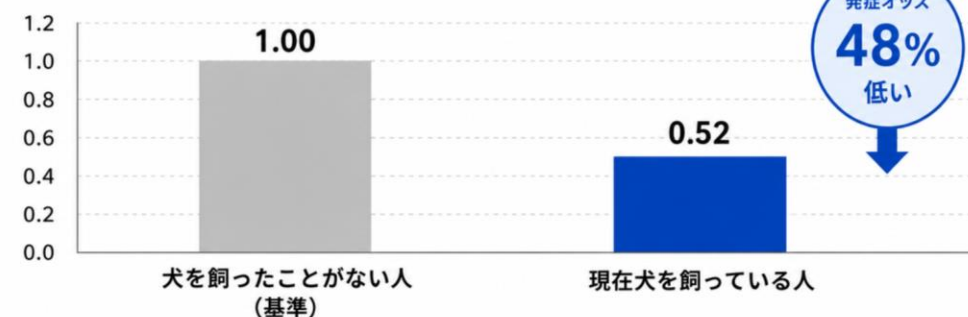
認知症発症リスクの低下

要介護認知症の発症オッズが『40%』低い

犬を飼育している高齢者は、非飼育者に比べ要介護認知症の発症オッズが40%低いことが報告されています。日常の世話に伴う身体活動や社会参加の維持が主な原因と考えられています。



犬の飼育と要介護認知症の発症オッズ (操作変数法による推定)



調査対象：地域在住高齢者 11,224人を約7.5年間追跡
(東京都大田区、調査開始時65～84歳)

※ 操作変数法による解析の結果、現在犬を飼っている人は、犬を飼ったことがない人と比較して、要介護認知症の発症オッズが48%低いことが示されました (オッズ比 0.52、95%信頼区間 0.27～0.98)。

※ オッズ比 (OR) が1より小さいほど、発症オッズが低いことを示します。

※ 本研究は観察研究であり、この解析結果のみから犬の飼育による因果関係を断定することはできません。

出典：東京都健康長寿医療センター

ペットとの暮らしの価値とそれに伴う配慮

1

ペットとの暮らしは、幼少期のペット飼育によるアレルギーリスクの減少、介護費用の抑制、認知症発症リスクの低下などの事例がある

2

犬との社会参加には価値が期待される一方、犬が苦手な人、アレルギーのある人、過去に怖い経験をした人への配慮が不可欠

3

機会が増やすだけでなく、ペットの社会的行動と飼い主の適切な管理と配慮など、安全と選択可能性を支える共通ルールが必要である



ペットパスポート®プロジェクトの概要と目的

犬の行動学に基づく制度設計

1



社会的なマナー・しつけをクリアしたペアの認定：

- ・単なる「犬のしつけ認定」ではなく、飼い主のマナー・飼養知識をセットで客観評価

2



犬の社会的行動適正の客観的な確認：

- ・狂犬病予防や混合ワクチン、マイクロチップ等の予防管理を確認

3



本プロジェクトの真の目的：

- ・単なる愛犬家の利便向上（お出かけ場所を増やすこと）ではありません
- ・人とペットが公共空間を安全に共有し、人・ペット・環境の『ワンヘルス』を向上
- ・最終的に、国民の健康寿命延伸と人と動物が豊かに調和する社会を構築します

4

目指す制度の3領域：



① 健康要件

健康状態と
予防措置等の確認



② 行動要件

公共空間での
安全にかかわる
行動の確認



③ 飼い主要件

適正飼養、
安全管理、
周囲への配慮の確認

※具体的な項目・判定基準・運用方法は、今後の検証を経て決定します



「ペットパスポート®」の構想図



ペットパスポート®の普及の流れ

自治体内でのパートナー店舗を増やす

顧客の増加

ペットとの接点増加

飼育意向率増加

自治体知名度向上



期待する変化の仮説

パートナー加盟店数、利用件数、トラブル件数、一般利用者・店舗・飼い主の受容度

想定するペットパスポート®制度運用（案）



店舗参加モデル（案）

加盟パートナー店の4ステップ

1 制度の理解

日本ヘルスケア協会事務局からの案内やガイドラインを通じて、制度趣旨とルールを理解。



2 申請・審査・エリア登録

申請書（仮）を提出し、店舗の同伴可能エリア（サイズ・頭数）を登録。



3 証明書・資材の発行

「パートナー店ステッカー」や一般客への説明、犬同伴時のお願い事項を示す告示物等を送付。



4 受け入れ開始・周知・保有者サポート

店頭ステッカー等を掲示し、パスポート保有ペアのスマートな受け入れをサポート。



店舗に期待される効果



他店舗との差別化による新規顧客の獲得・集客向上



明確なルールの明文化により、スタッフの確認負荷とトラブルを未然に防止



飼い主間のロイヤルコミュニティ化による来店頻度の拡大



ブランド価値・企業イメージの向上（SDGs／共生社会への貢献）



リピーター増加による売上・LTVの向上



2030年に向けた目標案

【2030年までの目標】

- プロジェクト取り組み自治体数：16市区町村
- ペットパスポート®（PP）取得者数：15,000名
- PPパートナー店舗数：3,200店

会員番号

名前

発行年月日

有効期限

年

月

まで有効

PET PASSPORT

パートナー情報

名前

生年月日

マイクロチップ番号



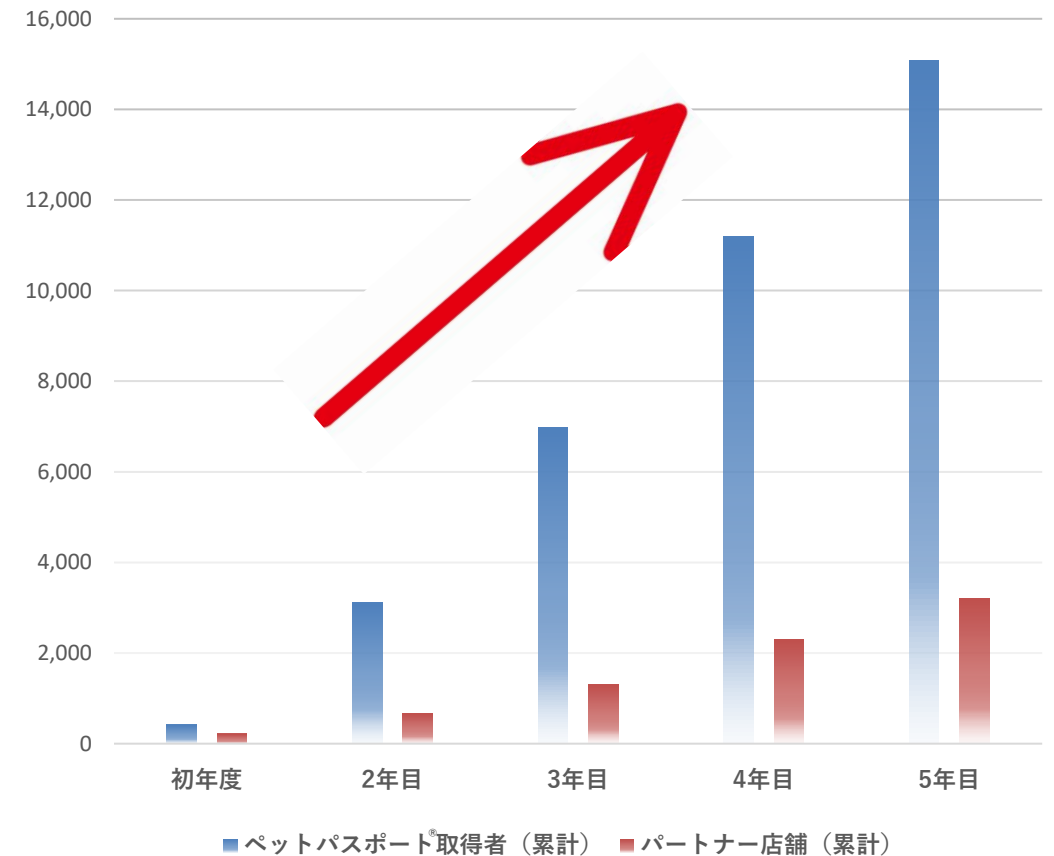
状態続ける、喧嘩する、人にかみつくなどの人・犬に対して迷惑行為を飼い主が制止できない場合はパスポートを返還致します。

※家族であっても登録者以外に譲渡する事はできません

発行：JAHI 公益財団法人 日本ヘルスケア協会 Japan Association of Health Care Initiative

人とペットとの共生によるワンヘルス社会

ペットパスポート®取得者・店舗数の年次推移
(累計)



年次	ペットパスポート取得者 (累計)	パートナー店舗 (累計)
初年度	~500	~200
2年目	~3,000	~500
3年目	~7,000	~1,500
4年目	~11,000	~2,500
5年目	~15,000	~3,200

■ ペットパスポート取得者 (累計) ■ パートナー店舗 (累計)

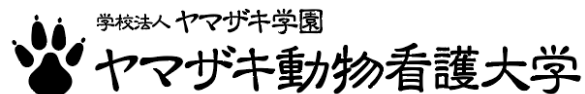


協賛企業・後援団体 一覧

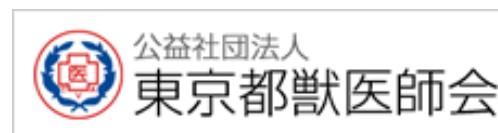
【特別協賛】



【一般協賛】



【後援団体】





③認定制度・認定試験・実証研究

ヤマザキ動物看護大学 准教授 秋山順子



もっと、ずっと、いっしょに。

認定するのは、犬だけでなく「人と犬の組み合わせ」

社会の中で安心して行動できること

犬

- ✓ 人や犬への適切な反応
- ✓ 基本的なコントロール
- ✓ 公共空間で落ち着いて過ごす

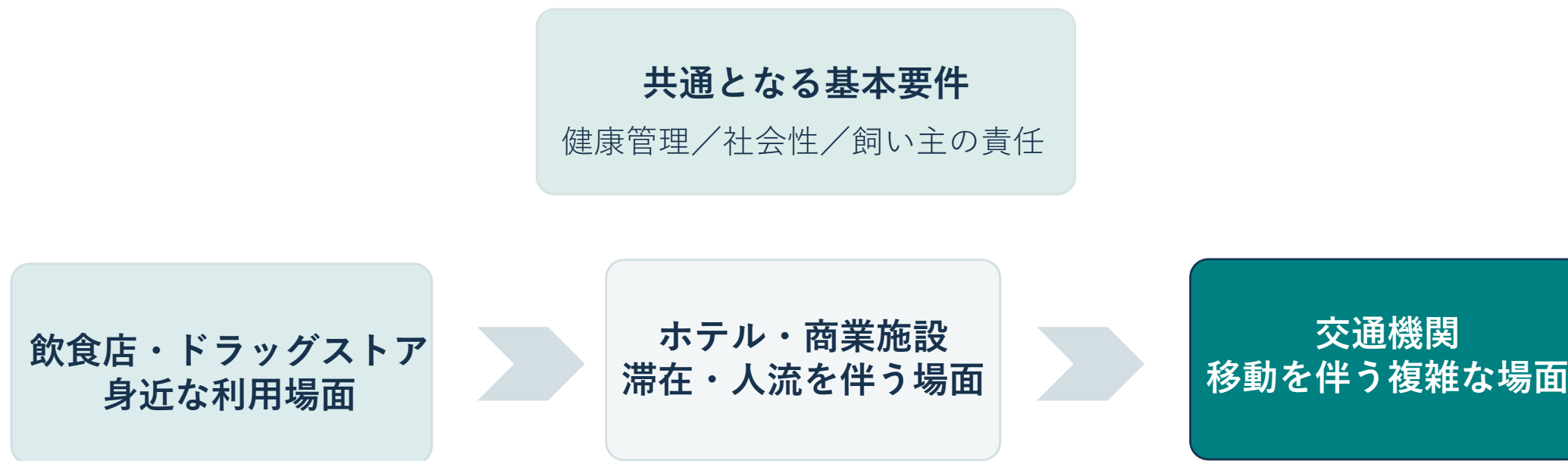
飼い主

- ✓ 適正飼養に関する知識
- ✓ 犬を適切に管理する
- ✓ 周囲への配慮を行動で示す

個々の動作の達成ではなく、公共空間での安全・安心につながる行動を確認



認定の考え方 | 社会参加の場面を広げる



いずれの利用場面も、
共通する基本要件を基盤とする利用場面が広がるほど、
環境は複雑になり、多様な刺激・状況への対応が求められる



認定基準（草案） | 社会生活に共通する6つの基本領域

01 人・他犬とのすれ違い

適切な距離を保ち、安全に行動できる

02 見知らぬ人がいる状況

過度に興奮・警戒せず落ち着いていられる

03 出入口での行動

飛び出さず、安全に出入りできる

04 公共空間での待機

周囲の迷惑にならず落ち着いて過ごせる

05 周囲の刺激への対応

音や人・物の動きに過度に反応しない

06 飼い主による適切な管理

犬の状態を把握し、状況に応じて対応できる

特定のコマンドの達成ではなく、
実際の利用場面における「犬の行動」と「飼い主の管理」を評価



基本認定項目を、実際の利用場面で検証する

社会生活に共通する6つの基本領域



まず「飲食店舗」をモデルケースとして具体化



受入れ側のニーズ＋予備検証から基準を修正

飲食店舗は

- ・人との接触
- ・他犬との接触
- ・一定時間の待機
- ・音や人の動き
- ・入退店

など、複数の基本領域を確認



今回は飲食店利用に関連する項目に絞り検証します

飲食店舗を想定した確認場面（案）

入店時

- ・ 人・犬とのすれ違い
- ・ 出入口での安全な行動
など

店内

- ・ 見知らぬ人からの声かけ
- ・ 足元や椅子などでの待機
- ・ 人・他犬の通過
など

環境刺激

- ・ 椅子を引く
- ・ 食器等の音
- ・ 人の急な動き
など

すべての場面で「飼い主による適切な管理」を確認



認定基準をどのように検証するか

実施可能性

評価可能性

判定の明確性

安全性・
動物福祉

現在は、認定項目と判定基準の検証に向けて準備している段階です



まとめ | 社会から信頼される認定制度に向けて

認定の考え方

- ✓ 犬だけでなく「犬と飼い主のペア」を認定
- ✓ 特定の動作やコマンドではなく、**社会の中で安全・安心につながる行動**を確認
- ✓ **犬の行動 + 飼い主による適切な管理**を重視



認定することがゴールではなく、
安心して犬と社会参加できる環境づくりへ



④CAPP活動犬デモンストレーション

完璧さではなく、犬の反応と飼い主の対応を実際に見る



もっと、ずっと、いっしょに。

デモンストレーションにおける観察のポイント

- **【見知らぬ人との穏やかな挨拶】**

他人が突然話しかけたり、優しく触れてきたりした際、犬が過度に興奮・警戒せず、落ち着いて対応できるか。

- **【不意の刺激に対する反応】**

落としたナプキンやスプーンを急に拾う、椅子が急に引かれる、など急な動きに対し、一時的に驚くことがあっても、パニックにならずに落ち着きを取り戻せるか。

- **【飼い主のストレスサイン検知力】**

犬のストレスサインや状態の変化を飼い主が把握し、必要に応じて適切に対処できているか。

- **【対犬に対する反応】**

すれ違いだけではなく、食事中にそばを他犬が通過することに対して、過剰な反応（敵対、興奮いずれも）しない。



実際にデモンストレーションを見てみましょう





⑤次の一歩へ

人と犬が安心して暮らせる共生社会を共に創り上げる



もっと、ずっと、いっしょに。

ペットパスポート[®]が描く共生社会の未来

行ける場所を増やすだけの同伴社会ではなく、
犬が苦手な人々にも決して不安を感じさせない思いやりのある社会。

人と犬が、街にいたことが『ごく自然』に受け止められ、
生活の質（QOL）と心身の健康（ワンヘルス）が持続的に向上する社会へ。

— もっと、ずっと、いっしょに。 —



人と犬がもっと一緒に暮らしていける社会へ この仕組みを一緒に育てていきませんか？



出典元： ユニ・チャーム株式会社

ペットパスポート®プロジェクトでは、認定制度の検討や実証研究、受け入れ環境づくりにご協力いただける皆さまを募集しています。

本日はご清聴いただきまして ありがとうございます。
入場時にお配りしたチラシの二次元コードより
アンケートへのご協力をお願いいたします。



講演の感想やご意見をお聞かせください